京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

〈時間-生〉芸術の研究--ボードレールとその受容

Study of time and life in modern art - Baudelaire and his legacy acceptance

2. 研究代表者氏名

小倉康寛

Yasuhiro Ogura

3. 研究期間

2021 年 4 月-2022 年 3 月

4. 研究目的

シャルル・ボードレール（Charles Baudelaire, 1821-1867）は、批評家として「決して間違えることがなかった」。ヴァレリーが宣言したように、『悪の花』の作者は 20 世紀初頭、詩学、芸術論、モダニズム論などの分野で、近代の起点という意味での「権威」になる。その後の研究史を振り返れば、こうした描き方は、否定と肯定の繰り返しだった。今後、彼の位置はどのようになるのか。本研究は時間という、多くの作家に共通する根源的なテーマを視角に、各作家と我々が、ボードレールとどのような距離にあるのか、捉え直しを図る。

本研究は発表者が、⑴時間をテーマにボードレールの作品を論じた上で、⑵バンヴィル、マラルメ、ドビュッシー、ヴァレリーにおける受容や影響関係を考察していく。⑶また 20 世紀の哲学で、詩の果たした役割をも論究する。本研究は時の観念という人間の生死の根幹にあるものが、作家ごとに異なることを作品の分析から理解していく。こうして浮き彫りになった〈時間-生〉の相対性を手掛かりに、本研究は、ボードレールの現代的な位置を見定める。

Charles Baudelaire (1821-1867) was a critic who ""never made a mistake."" As Paul Valéry declared, in the early 20th century, the author of ""The Flowers of Evil"" became an authority in such areas as poetics, artistic theory, and modernist theory, in the sense of representing the starting point of the modern era. Looking back through the history of subsequent research, this schema was repeatedly denied and affirmed. How will Baudelaire’s ideas be perceived, going forward? This research focuses on the theme of time, which is common to many artists, and reconsiders the distance from Baudelaire to each of us.

We will discuss Baudelaire’s work and then consider its acceptance and

influence in the works of Banville, Mallarmé, Debussy, and Valéry. Also, we will argue that poetry provides valuable clues to the philosophy of the 20th century.

Through this research, we will gain an understanding from analysis of the works that the idea of time, which is the basis of human life and death, differs from artist to artist. Using the relativity of ″″time-life″″ that has been highlighted in this way as a clue, this study determines the modern position of Baudelaire.

5. 研究成果の概要

本研究班の成果はシンポジウム「ボードレール生誕 200 周年記念、〈時間-生〉芸術の研究――ボードレールとその受容」(2021 年 12 月 18 日、19 日）として公表され、合計で 8 人が発表した。開始にあたり、小倉がボードレールに関する先行研究が整理し、時間を切り口に、諸作家や別のテーマを結びつけていくものであることを示した。

第 1 部のボードレールに関するセクションでは、まず清水がボードレールの読書経験に着目し、1840 年代にはスタンダールに心酔したものの、1850 年代にはキリスト教の原罪への関心から、ホフマンやド・カンシーへと視点が変わったことを示した。次に廣田が『悪の花』に出てくる temps の単語を 5 つに分類し、ボードレールが過去へ遡る詩が多いこと、その遡り方が小刻みなものであるとまとめた。佐々木はジャーナリズムを切り口に、美術批評と小説をも念頭におきつつ、さらには散文詩が報道記事と見分けがつかなくなったことに目を向けた。小倉は、アウグスティヌスの受容を手がかりに、ボードレールがキリスト教的な行き詰まりの先にある意識-時間の分断を乗り越えるために、コラージュの創作技術を用いていたのではないか、と考察した。

第 2 部の詩人の受容では、まず鳥山が蛇に関連する詩やスケッチを手がかりに対比し、ボードレールの蛇が宗教的であった一方で、ヴァレリーの蛇が知性や生理学的な感覚を表しており、そこから文体の根幹の違いまで見通せるのではないか、と議論した。また中畑は、「ボードレールの終わりから始める」というマラルメの言葉を手がかりに、マラルメがいかに先人を乗り越え、宇宙のシステムそのものを示すべく「賽子の一擲」のような新たな作品に挑んだかを示した。

第 3 部では、服部がレヴィナスの論考の要所でボードレールの「仮面」などを引用していることを指摘し、プーレの円環的なボードレール論との対比のなかで、レヴィナスがボードレールの楽園の時間と距離を置きつつ、むしろその地獄の時間に共鳴していたことを明確にした。また青柳が、ドビュッシーが音楽化したボードレール作品を取り上げ、音楽がつくことで元の詩にどのようなニュアンスがついたかをわかりやすく説明しつた。最後に平野が、作家としての独自の視点から、ボードレールの今日的な意義について、生命力の移動や体感主義などの鍵言葉を手がかりに示した。

パネリスト同士のディスカッションや会場からの質問を通じて、いくつもの重要な論点が出た。それらは主に、ボードレールの今日的な限界と可能性とを切り分けるものであったが、ここから 19 世紀中葉から 20 世紀にかけての文学史的な流れに見通しが与えられた。ボードレールの頃からすでに宗教の問題は意味を変化させつつあり、その後の詩人たちにとって「神」に関する言及は少なくなるが、マラルメやヴァレリーたちは超越性の問題からは逃れられないと気がついたのであり、その超越性の問題は 20 世紀の哲学思想の方から振り返る形で整理できることが示された。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

「ボードレール生誕 200 周年記念、〈時間-生〉芸術の研究――ボードレールとその受容」（2021 年 12 月 18 日、19 日、人文研大会議室＋Zoom ウェビナー）

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

ボードレール・シンポジウムは成果論文集で刊行することを予定しているが、これは 2022 年度以降、関係者と相談を重ねて是非実現できるよう努力したい。